

## オホーツク地域におけるガン・ハクチョウ類について

秋山 恵美子 濤沸湖水鳥・湿地センター

川崎 里実 日本野鳥の会オホーツク支部

北海道東部、オホーツク海に面した海岸には海跡湖が点在し、海岸線の砂丘には原生花園が広がり、サロマ湖から濤釣沼にかけては広く網走国定公園に指定されている。この地域は国内有数の渡り鳥の中継地となっており、濤沸湖は渡り鳥の大規模な飛来地として国際的に重要な湿地であることが認められ、2005年にラムサール条約登録湿地となった。

オホーツクに飛来するガン類はヒシクイ（亜種ヒシクイ）で、特に濤沸湖周辺は、ここ10年あまりで飛来数が増加した。また、2015年ごろからマガンがまとまった数で飛来するようになり、それまでは珍鳥だったシジュウカラガン、ハクガンも毎年少数が見られるようになった。ここ数年、ガン類の調査の方法とエリアが統一できるようになり、毎年秋と春に7,000羽～8,000羽強の亜種ヒシクイ、少数オオヒシクイが入ることがわかってきた。濤釣沼はねぐら入り調査の報告が認められ、北海道指定の鳥獣保護区に指定されることとなった。

濤沸湖は古くから「ハクチョウの湖」として知られ、かつてオオハクチョウの羽数は「一目3千羽」と言われるほどであった。2004年から行われているハクチョウ類に特化した秋の調査（湖面のみ）の結果では、2007年を最後に2,000羽以下、2014年以降は1,000羽以下となった。2010年の餌付け禁止以降、湖面に留まるオオハクチョウは更に減少し、濤沸湖の西側にある藻琴湖と周辺の農耕地を利用する個体が増加した。ハクチョウ類の個体数を把握するためにはガン類同様、広域に関係者が協力して調査を行う必要がある。

近年、オオハクチョウだけでなくガン類の増加に伴い食害が認識されるようになった。ビールケースを置くなどの忌避が見られるが、農家によってその対応には差が見られる。農業、観光関係者からはオオハクチョウの餌付け再開の声が聞かれていたが、高病原性鳥インフルエンザの発生や濤沸湖水鳥・湿地センターでの解説等により、理解を得られてきていると思われる。ガン・カモ類に対する地域住民の理解や被害防除を進めていくための基礎的な調査や観察会など、出来ることから進めていきたい。

オホーツク地方のガン類の主なねぐら位置と採食地

